

## 天草版平家物語論 (二)

— 全四巻の構成 —

玉 懸 洋 子

〔抄 録〕

『天草版平家物語』は、キリスト敎宣敎師の日本語・日本歴史学習用として編纂された平家物語の抄訳である。編・抄訳者日本人キリシタン・ハビアンは、平家物語十二巻を整理再編し、人物の行動と言葉を中心に当時の現代語による新たな「平家物語」四巻と成した。

全巻を14の話群にまとめ、「抄訳の態度の転換」を指摘されている前半部・後半部の違いに着目して、原拠平家物語と比較しながら時間に関わる記述や人物のとらえ方を探ると、清盛など「不思議の人」の省略部の意味、妓王・仏物語と維盛物語の特異な位置が明らかになる。

ハビアン工夫の兩人問答による物語進行や、原拠章段の大胆な省略、丁寧な語の書き換えは、第一に語学テキストとしての有用性に関り、第二には、「布敎の妨げとなる内容は省略すべし」との編集指示が、原拠平家物語がもつ多くの神仏（特に仏敎）に関する記事・物語と衝突したことに拠る。そこにキリシタン文学者・ハビアンの苦心と密かな宣言を読み取ることが出来る。

**キーワード** 日本語・日本歴史学習用敎科書 抄訳の態度の転換 「不思議の人」  
妓王・仏物語の位置 弱者維盛の物語

### はじめに

『天草版平家物語』は、「日本のことばと Historia を習ひ知らんと欲する人のために世話に和らげたる平家の物語 FEIQE NO MONOGATARI」と題された書（1592年、イエズス会天草コレジオ刊行、ローマ字表記400ページ余の活字本）である。緒言「読誦の人に対して書す」末尾の署名により、日本人キリシタン Fucan Fabian（不干ハビアン 1565～1621）の著作であると知られる。しかし、イエズス会布敎方針に基づいて編集・刊行された日本語・日本歴史学習用敎科書であるという成立事情から、これまで日本語学の分野での研究が多く、16世紀末成立の日本文学の一作品として取り上げられ、活発な議論が交されているようには見えない。私は先学に学び、前二稿に続いて『天草版平家物語』四巻の構成を探り、作品全体の姿を明ら

かにしたいと思う<sup>(1)</sup>。

## 一、『天草版平家物語』の時間に関する記述

イエズス会の師より「この国の風俗を知り、また言葉を達すべきこと」という二つの目的のため、「わが国の文字にうつ」すにふさわしい日本語の書を選んで編・抄訳せよ、との命を受けた<sup>イルマン</sup>修道士ハビアンは、「日域の往時をとむらふべき書」として平家物語を選んだ、と緒言に記している。

Historia（歴史、物語）、「日域の往時」と言うからには、時間軸の設定、時間の進行とともに生起する事柄とそれを担う人物・人物群の描かれ方、さらには人間の上であってそれを支配する何者かの捉え方、などが問題になる。この章では、原拠平家物語と比較しながら、『天草版』の時間に関する記述を観察し、この書の構成を考える手掛かりとしたい<sup>(2)</sup>。

原拠平家物語は、年代記的な性格を持っている。百二十句本では巻一（覚一本においては巻一と巻十二）を除くすべての巻は、「治承元年五月五日」（巻二）のように年号・年月日で書き始められ、うち巻三、四、六、九、十一は各年の「正月一日」（巻十一のみ「正月十日」）で始まる。また年末の記事中に、「さるほどに年暮れて治承も二年になりにけり」（巻二）のような一文をもつ。このように平家物語の巻二からの各巻は、時間的に堅く組み立てられており、物語の筋から離れて故事や説話に入り込んでも、この枠は強固に動かない。平家物語を開いて「同じく何々日」とある時、ページを遡ればその年号・年月を知ることは容易である。

対して、『天草版』の巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲには、このような明確な時間的枠は見られない。例えば、平家物語覚一本巻二「西光被斬」を索引として参照することなしに、『天草版』[巻Ⅰの3]の、「同じ年の五月二十日ごろの小夜ふけ方に、行綱清盛のもとへ…」が、どの年の出来事なのか知ることは出来ない。「同じ年」とあるその章に年記はなく、前章の「嘉応元年」「嘉応二年」の記事は全く関係がない。この「五月二十日ごろ」は同じ章の「あくれば六月ついたちのまだ暗かったに、清盛、資成といふ者を呼うで」の記事に連続し、行綱返り忠、成親・西光捕縛と物語は展開する。ここでの「何月何日」は、ハビアンの語りたい一つのまとまった物語の中のごく短い時間的経過を示すのみで、その歴史的時間を特定することはない。巻Ⅱにおいても、「宮は五月十五日夜の雲間の月を」「あくれば十六日高倉宮は」「さて十六日の夜に入って三位入道は」と緊迫した場面の続く高倉宮・頼政謀反の段（巻Ⅱの2及び3）や、「九月十八日に福原の新都をたつて十九日に…やがて二十日に…」という平家東国下向の記事（巻Ⅱの9）も、どの年の出来事か知ることは出来ない。

一方、巻Ⅰには、「上古」と「末代」、「保元平治よりこのかた」という時間記述があり、前記「嘉応元年」「同二年」（巻Ⅰの2）と「安元三年七月二十日」「同二十六日」（成経が帰洛途上、備前児島で読む亡父成親の手跡にある、巻Ⅰの11）に年号が記される。巻Ⅱでは、「平家世を取って二十余年」（三井寺の老僧真海の言、巻Ⅱの4）、「頼朝は去んぬる平治元年十二月

に父義朝の謀叛によって…十四の年…二十余年の春秋を」(巻IIの9)、「平治の合戦ののち…四十年首にかけ」(文覚の言、巻IIの9)のように、「平治元年」の元号とともに「二十年」という時間の経過が示される。巻IIIにも、「(兼遠が義仲を)二十余年養育してやうやう人となるる」(巻IIIの1)、「さすが二十年余りの主であったれば」(都落に当り平家に長く仕えた者たちの思い、巻IIIの8)、「この二十余年あまり見なんだ源氏の白旗が」(巻IIIの9)と「二十余年」が繰り返される。およそ「保元平治」を起点とし、治承年間に至る約二十年は、平氏の栄華の時間であり、反平氏に立ち上がる源氏棟梁たちの雌伏の時間でもあった。

このように、巻I・II・IIIにおいてハビアンが語ろうとした Historia、「日域の往時」の物語は、原拠平家物語のように年代記的な時間を特定することはないが、「保元平治」(平氏の勝利)、「嘉応二年」(世のみだれ初めた根本)、「安元三年」(鹿ヶ谷事件)と数少ない年号とともに、「二十余年」の時間経過を印象付けて、重点的に物語を綴っている。

これに対して、巻IVは明らかに異なる。次に見るように、巻IV(正確には[巻IVの2]から)は、原拠平家物語の巻九～巻十二の四巻それぞれ巻頭の年号月日を、すべて聞き手右馬之允(VMと表記)の依頼もしくは懲憑に応じて語り手喜一検校(QIと表記)が語りだす初めの行に明示する。

[巻IVの2] VM. おくたびれあらうずれども、こよひもなほ先をお語りあれ。

QI. かしこまった。寿永三年正月一日のことでござるに：(\*巻九巻頭に同じ)

[巻IVの10]<sup>(3)</sup> VM. この茶を飲むで息をついで、まちっとお語りあれ。

QI. はあ、これはかたじけない：…寿永三年三月十二日去んぬる七日に一の谷で討たれた平家の首ども…(\*巻十巻頭に同じ)

[巻IVの16] VM. 屋島はのちには何となったぞ？

QI. 元暦二年正月十日に義経院の御所へ参って…(\*巻十一巻頭に同じ)

[巻IVの21] VM. 大臣殿の最後をも聞きたいの。

QI. 元暦二年五月七日の卯の刻に義経大臣殿の父子を、…(\*巻十二巻頭に同じ)

その後、巻末まで、次のように年号年月日もしくは季節を記す。

「文治元年九月二十日余りのこと…」(女院大原へ 巻IVの23)、「元暦二年九月二十九日…(堀川夜討 巻IVの24)、「文治二年の春のころ…」(大原御幸 巻IVの27)、「文治五年三月…」(六代被斬、平家断絶 巻IVの28)、「正治元年の正月……」(頼朝の死 同)

私はこれまで、『天草版』の登場人物の呼称と、平家物語と全く異なる場で用いられる「天道」の語6例の検討から、巻I・II・IIIと巻IVとの間に抄訳の仕方に転換があることを予想してきた<sup>(4)</sup>。今ここで時間記述の点でも同じ指標が得られたことを確認しておきたい。

さらに、『天草版』の口語訳の実態を分析した清瀬良一氏は、巻I・巻II・巻IIIと巻IVの(1)(巻一から巻八まで)を前半部、巻IVの(2)から終りまで(巻九から巻十二まで)を後半部とし、「その境目は必ずしも截然としているわけではないが、およそ」と断った上で、

前半部と後半部との間には、口語訳の出かたに…一貫性にかける面があり、口語訳の存立状態がかなり相違しているのである。前半の部分においては、…口訳に手の加わっていると思われる語句、口語性の豊かであると思われる語句が多く見られ、口語語句の多様性が認められる。その結果、〈平家〉の表現面とのへだたりが大きくなっている。一方、後半の部分においては、全般的に逐語訳がかなり目立ち、ある種の文語的な語句が偏って見られるなど、〈平家〉の表現面と密着した文の運びになっている。

と述べている<sup>(5)</sup>。「豊かな口語語句の多様性」を特徴とする前半部、「逐語的、文語的な語句」の目立つ後半部、その境目を巻Ⅳの（１）と（２）の間に置くという清瀬氏の見解は、以上の見方に一致するものと思う。

## 二、『天草版平家物語』各巻の物語進行と登場人物

さて、ハビアンが採った物語進行の手法として、最も特徴的な点は、その長い章題と聞き手・語り手二人の問答が連動し、語り手の物語を導き出すという点にある。

例を〔巻Ⅰの８〕にとると、〔章題〕〔問答〕〔物語〕は次のように展開する。

〔章題〕 成親の最後のこと：その北の方都にて尼になりかの後世をとむらはれたこと。ならびに少将かさねて鬼界が島へ流され、そこで康頼や、俊寛やなどと憂き目をしのがれたこと。

〔問答〕 VM. (右馬之允) とてもものに成親卿の果てられた様体と、少将の鬼界が島へまた流されたことをもお語りあれ。

QI. (喜一檢校) 心得ました。(ここから〔物語〕となる) さうござって俊寛僧都と、康頼と、この少将相具して三人… (以下略)

『天草版』の〔章題〕が、その章の主要人物と物語内容を予告する長めの「小見出し」とも言うべき特徴的なものであること、〔問答〕の聞き手が〔章題〕を繰り返す形で質問を発し、語り手がそれに応えて物語を始める、という動的な物語進行の型を持つこと、が分かる。全巻64章に一貫するこの語り方は、イエズス会の「師」より「今この平家物語をば書物のごとくにせず、兩人相對して雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写せよ」(緒言)との指示を受けて成ったこの著述の特性をよく表しており、これがすなわちハビアン工夫の主要第一点であった<sup>(6)</sup>。今、この〔章題〕を人物と事件の索引・要約として全体を一覧する便宜とし、〔章題〕に登場する人物を数えると、次のようになる。

巻Ⅰ (12章) 一述べ人数28 (実人数13)

巻Ⅱ (10章) 一述べ人数21+x (実人数16+「平家の兵ども」)

巻Ⅲ (13章) 一述べ人数26+x (実人数16+「(平氏) 一門の人々」)

巻Ⅳ (29章) 一述べ人数64+x (実人数38+「平家の生捕り」)

この数字からも巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがほぼ同じ規模のものとして構想され、巻ⅣはⅠ・Ⅱ・Ⅲ各巻

の約二倍の物語量・人物で成り立っていることが分る。

(一) 前半部 (巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ) の話群と人物 [(1) (2) (3) ～は各巻の章を示す]

巻Ⅰは覚一本の巻一、二、三を原拠とする。原拠の章段を思い切って省略し、ほぼ各巻に対応する三話群で構成される。巻三後半部の「重盛の死」に関する章を省略している。

話群1 (1)「殿上闇討」事件を詳細に訳して平氏の栄華を語り始め、(2)ただちに「殿下乗合」事件を語り、忠盛—清盛—重盛の平氏三代が登場。

話群2 (3)より(8)まで。反平氏謀叛の物語の始まり。鹿ヶ谷事件の顛末、陰謀の発覚、成親・西光の流罪・処罰、康頼・成経・俊寛三人の鬼界が島流罪。その間に重盛の清盛への「教訓」があり、教盛の苦衷が語られる。

話群3 (9)より(12)まで。鬼界が島における康頼らの熊野詣で、卒塔婆流しを詳細に語る。赦免されず一人残る俊寛、海路はるか島に渡り俊寛の死を見届けその後世をとむらう有王の物語。

巻Ⅱは(1)に「妓王と仏」段(覚一本巻一に対応)が位置する点が、構成上大きな問題である。

話群4 (1)妓王・仏たち四女性の「後生を願う」物語をほとんど省略のない訳文で綴る。

話群5 (2)より(8)まで。頼政の唆しにより高倉宮拳兵、三井寺落ち、宇治の合戦、信連、浄妙坊などの活躍、宮・頼政の死。百二十句本巻四(一部省略)に当る。(以下、全て相当する百二十句本の巻数を記す)

話群6 (9)より(10)まで。文覚の勧めをうけて頼朝拳兵。平家軍東国に発向し、富士川で敗走。巻五のほとんどを省略し、頼朝の勝鬨と平氏の敗走を対照させて巻尾。

巻Ⅲは、巻六を大胆に省略、義仲の生い立ちと反平氏の旗揚げだけを抄し、高倉院の死及び清盛の死とそれに纏わる物語を取り上げない。「入道死去」「祇園之女御」に描かれる清盛の姿を語らなかったことは、巻三の重盛の死、巻五の文覚物語の省略とともに大きな問題である。

話群7 (1)より(5)まで。「木曾の物語 その一」の話群。義仲拳兵から俱利伽羅谷の合戦、山門との牒状往復、入京まで。長茂、斎明威儀師、実盛の物語。巻六のごく一部と巻七前半部に当る。

話群8 (6)より(10)まで。木曾に追われて平氏の平氏都落ち、大宰府落ちに至る。忠度と俊成、維盛一家の別れ、が綿々と語られる。(7)は巻Ⅳの中心、維盛物語の序曲をなす。巻七後半部と巻八前半部に当る。

話群9 (11)より(13)まで。「木曾物語 その二」の話群。京における木曾の「不躰」「狼藉」、水島合戦、兼康・倉光の物語、法住寺合戦、平家に超過する木曾の悪行。巻八の後半部に当る。

## （二）後半部（巻Ⅳ）の話群と人物

すでに触れたように、巻Ⅳは、巻Ⅲまでと異なり、歴史的時間を明示してほぼ原典に沿って物語る。完全に省略するのは巻十一の「剣之巻」上、下、「鏡之沙汰」の三句のみである。

【話群10】(1) は巻八の終りに当る。(2) より (5) は巻Ⅲの義仲物語を承けてその最期を語る。兼平・兼光の活躍と頼朝・範頼・義経三兄弟の登場。巻九の前半部に当る。

【話群11】(6) より (10)。一の谷の合戦。熊谷・平山・敦盛・盛俊・小宰相と乳母などが詳しく語られる。巻九のほとんど全てを取り上げる。

【話群12】(10) より (15)。巻Ⅳの核心部である。維盛と重衡の二人を主人公として、それぞれ巡礼を思わせる高野山参りや東海道下り、善知識たる僧との出会い、懺悔、受戒、死に至る、家族・従者を巻き込んだ一大ドラマが、道行文、和歌の贈答を含む修辭を凝らして展開する。斎藤五・斎藤六、重景・石童丸、滝口・横笛、千手などが、丁寧に語られる。巻十のほぼ全てに相当する。

【話群13】(16) より (18)。屋島の合戦、壇の浦の合戦、平氏滅亡に至る。源平双方激しい攻防、駆け引き、裏切り、勇武、献身など、多彩な場面が展開。巻十一の前半部に当る。

【話群14】(19) より (28)。平氏敗戦後の物語。宗盛と清宗・副将、建礼門院のその後、六代と文覚の物語をもって平家断絶に至る。巻十一の後半部と巻十二に当る。

以上のように整理した中から、前半部、後半部に分けて次章にて問題点を探る。

## 三、『天草版平家物語』前半部（巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の問題点

### （一）人物の描き方、物語進行の特徴

第一に、前半部（巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）において、抄訳者ハビアンは、原拠平家物語の錯綜して起る事件・事象、背後にうねる歴史の流れ、それに纏わる日本や中国の故事を手際よく省略し、簡潔平明に整理された事件と人間関係を設定した。彼は、訳業の関心を、具体的な場において緊張関係にある人物の言葉と行動に集中し、年代記的な時間枠に縛られず、事件全容の説明や人物の全体的造型を損なうことがあっても、一つ一つの場面を積み重ねた人物中心の歴史を語ろうとした。これは、有用な日本語学習書編纂の狙いに適うものであったと思われる。

例えば、ハビアン抄訳『天草版』[巻Ⅰの1]の喜一検校の語り始めは、次のようである。

まづ平家物語の書き初めにはおごりをきはめ、人を人とも思はぬやうなる者はやがて滅びたといふ証跡に、大唐、日本においておごりをきはめた人々の果てた様体がかつ申してから、さて六波羅の入道前の太政大臣清盛公と申した人の行儀の不法なことをのせたものでござる。

平家物語巻頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に慣れ親しんでいる者にとっては、違和感を持つ口語訳であるに違いない。ここから、『天草版』に「仏教的無常観がない」と読むのも無理はないし、清盛の「行儀の不法なこと」にも異議の声があがるであろう。しかし、

外国語として日本語を学ぶ初学の宣教師にとってはどうであろうか。「証跡」「様体」「行儀の不法」など分かり易い言葉を挟みつつ、「おごりをきはめ、人を人とも思はぬやうなる者はやがて滅びた」というこの段の要点を伝えているのではないか。

引き続き本文においても、清盛の像は、捕われの西光との壮絶な口論 [巻 I の 3] と重盛教訓 [巻 I の 4] [巻 I の 6] の三場面に生き生きと語られるが、その他の場面における言動を合せても、横暴な権力者の一面的・表面的な姿をとらえたものとしか見えない。平家物語に圧倒的に描かれたこの巨大な人物像を見知っている者には、いかにも不十分な、不審な扱いである。

また、俊寛の場合、平家物語では「此俊寛も僧なれども、心もたけく、おごれる人にて、よしなき謀叛にもくみしてけるにこそ」(巻一「俊寛の沙汰 鶴川軍」)、「(配所で成親・康頼が熊野権現を勧請して帰洛を祈ろうとするに対して) 俊寛僧都は天性不信第一の人にて、是をもちいず」(巻二「康頼祝言」)と語られて後、「足摺」の場と「有王」「僧都死去」(巻三)が来る。対して、ハビアンは鬼界が島でのこの二場面(巻 I の10と12)のみに集中して、彼の生への執着と運命に立ち向かう姿と言葉を語っている。

第二に、すでに触れたところであるが、章題と VM. QI. 両人の問答が連動して物語を進行させる方法も、日本語学習者に内容理解と言語習得を容易にさせるためのものであった。あらためて巻 I 初め (1) (2) (3) 章の [章題] と [問答] を並べて見ると、

(1) 平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと。

VM. 平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してお語りあれ。

QI. やすいことをござる：おほかた語りませうず。…

(2) 重盛の次男関白殿へ狼藉をなされたこと：これ平家に対しての謀叛の根源となったこと。

VM. とてものことに平家に対しておこされた謀叛の起りをまちっとお語りあれ。

QI. かしこまってござる：嘉応元年のことをござったに：…

(3) 成親卿位争ひゆゑに、平家に謀叛を企てられたことが現れ、その身をはじめ、くみしたほどの者搦め捕られ、その内に西光といふ者は首をうたれたこと。

VM. さて平家の悪行はかからぬことぢやの？

QI. そのことをござる：平家の悪行はこればかりでござない、そのうへ…

という具合に、「清盛の威勢栄華」「平家の悪行」「謀叛の起り」「難儀をかけた人」などの語句が、物語を要約し、繰り返され、次の物語を導く。これは語学テキストの方法そのものである。また、巻 I 結び「このやうに人の思ひ嘆きの積る平家の末はなんとあらうか？おそろしいことぢや」から、巻 II 巻頭「VM. さてまことにたれにも、かれにも清盛は難儀をかけた人ぢやの？またその妓王がことをも聞きたい、お語りあれ。」へ、巻 II から、巻 III 巻頭「VM. ゆふべの物語があまり本意ないほどに、今はまた木曾殿の成り立ち、その謀叛のやうをもお語りあれ。」へと主題が引き継がれていくところも、学習者には理解し易い工夫であったと思われる。さらに、

このような両人間答の勢いが物語中の人物の対話にも及んで生き生きとしたセリフを生み、当時の現代語による会話中心の分りやすい平家物語を生んだ。

『天草版』前半部が、大まかな、時に曖昧な時間枠を設定しているのも、年号など日本語学習者に煩瑣な修練、記憶を強いることを避けた、語学テキストとしての配慮と思われる。これは「一人にあまたの名、官位の称へあることをも避くべし」との編集指示により、前半部においては、「入道相国」、「小松大臣」、「前右兵衛佐」などを、なるべく実名（清盛、重盛、頼朝）に一定したこと、「天道」という当時通行の語を、平家物語には見られない形で用いることにより、物語の進行を図ったことも、同じ理由によるものと思う<sup>(7)</sup>。

## （二）ハビアン語るなかつた「清盛の死」「重盛の死」「文覚荒行」

鈴木則郎氏は、「清盛を悪行者として強調することが『天草版』の最大の眼目であり、「清盛のもつ豊かな人間性を全体的に、…捉えていこうとする意識」「驚嘆すべき巨大な人物として捉える意識」は、「ほとんど認められない」とし、「（『天草版』が）清盛、文覚などに関する章段を省略したことは『平家物語』の本来的興味を減殺した」と論じている<sup>(8)</sup>。

確かに『天草版』の清盛の言動は、「難儀をかけた人」「行儀の不法な」人のそれであり、

あまりに怒ってもものいはれなんだ：しばしあってしゃつが首左右なう切るな、よくよくいましめておけと言はれたれば：…（[巻Ⅰの3] 捕縛された西光法師の悪口を聞いて）

大きに腹をたてて、大將軍維盛をば、鬼界が島へ流し、侍大将の忠清をば死罪に行へと、下知せられたところで、…（[巻Ⅱの10] 富士川合戦敗退の報告を受けて）

と、意に添わぬ者、逆らう者に対する一方的怒りを発する場が多い。わずかに「中宮やがて皇子御誕生なされて家門の栄華もいよいよ盛んにござらうずる」と重盛に平氏の栄えを祝われた時、「日ごろにも似いで、もつてのほかにやはらいで」ある姿 [巻Ⅰの10]（巻三「赦文」）が例外であるが、続く「御産」のほとんど全てを省略したため、「中宮…御産もとみに成やらず。入道相国・二位殿、胸に手ををいて、こはいかにせんこはいかにせんとぞあきれ給ふ。」「（御産平安、皇子誕生）後）入道相国あまりのうれしさに、声をあげてぞなけれける。」のような清盛の「人間性」を見ることは出来ない。

言うまでもなく平家物語における清盛の存在は他の誰にも隔絶して大きい。巻頭「祇園精舎」の段から、異朝本朝の叛臣に抜きん出て、「心も言葉も及ばれ」ぬ格別の人物である。その言動は常人の理解を超える「不思議なこと」であり、単なる「悪行者」の枠に入りきれない巨大な人間像は平家物語の大きな魅力である。死に臨んで二位の尼に遺した「但伊豆国流人前右兵衛佐頼朝カ頸ヲ終ヒニ見サリツルコソ安カラネ」（第五十五句「入道死去」）の言には、彼の異常な生のエネルギーの凝縮を見る思いがする。

渥美かをる氏は、「原作者の構想した清盛」には「天賦にそなわる超越的な“力”があったとする」と述べ、「善とか悪とかの倫理観を超越した一の“力”を「天賦に授かっていたから

こそ、位人臣を極め、天下を掌握」し、「王法仏法の尊厳に対しても罪悪意識なくして容赦なく侵害行為がなされた」と論じている<sup>(9)</sup>。

そうであるからこそ、清盛と平氏の繁昌は、熊野参詣の折の「鱸の船に踊入りたりける」瑞相により、「熊野権現のご利生」によるものと語られ、彼が受けた重病は焦熱地獄を思わせる激越異常なものである。二位の尼の夢には「閻魔ノ庁」より迎えが現れ、「終ニ熱死ニソ死玉ヒケル」、その「葬送ノ夜、不思議ノ事共数アリキ」、「実ニ八只人トモ覚ヘヌ事共多カリケリ」「旧イ人ノ申サレケルハ、清盛ハ…実ニハ白河院の御子也」など「不思議な」伝説に彩られることになった。キリシタン・ハビアンはこうした神仏の靈驗、夢告などの神秘的なことは一切語らない。この点について、鈴木則郎氏は『天草版』全体を詳細に検討し、「神託」や「瑞相」、「運命予言的」「神秘的、暗示的」「現世招福的」な記事は否定的に扱われ、意識的に排除されたこと、それはハビアンの思想的立場による、と論じている<sup>(10)</sup>。

「不思議」「不可思議」は、そもそも仏教語で「仏・菩薩の智慧や神通力、または経典に説く種々の行為など、言語・思慮の及ばない境地をさしている」(石田瑞麿氏『例解仏教語大辞典』小学館 1997)。また「悪」も「抜群の能力・気力・体力をもつ恐るべき人」の意味で、「悪源太」「悪左府」などと用いられる(『日本国語大辞典』第二版、小学館 2000)。この二つの語は超人的な、いわば「神」に特別視された存在を暗示している。

同じ事情で、ハビアンは「天性このおとゞは不思議の人にて、未来のこともかねてきとり給けるにや」(巻三「無文」)という重盛を語ることはない。巻二の、父清盛と二度相對して「天道」の語を重々しく重ねながら「教訓」する重盛は詳しく訳出したが、巻三(「医師問答」「無文」「燈籠之沙汰」「金渡」)の、熊野に参詣して「親父入道相国の躰をみるに、悪逆無道にして、ややもすれば君をなやまし奉る…一期の榮花なほあやふし」と神前に敬白し、まもなく病に臥し、宋朝名医の治療を断って出家、「臨終正念に住して遂に失給ぬ」という重盛の姿は全て語られない。そこでは、運命の予見、夢告、滅罪生善のための盛大な造堂供養、宋朝に大金を渡して「後生善処」を祈らせるなど、重盛の「不思議」が語られているからである。

次に、文覚という人物は[巻IIの9]に登場、自ら流人の身でありながら「早う謀叛をおこいて日本国をしたがへさせられい」と頼朝を唆し、福原へ駆けて院宣を得て戻る。平氏滅亡後[IVの26]に再び登場し、六代の助命のため今度は高尾から六波羅へ、さらに鎌倉の頼朝のもとへと東海道を駆ける。自分が正しいと思えば、その敵がたとえ法皇・天皇でも立ち向い、直ちに行動し、頼朝亡き後「年八十にあまって、隠岐の国に流され…つひに思<sup>おもひ</sup>死<sup>じ</sup>んだ。」(全巻末 [IVの28]の最後部)。隠岐の国に流される時の「手毬打ち冠者においてはわが流さるる所へつひに迎へませうずるものを」は、「天性不敵第一の荒聖」文覚最後の「悪口」である。

このように、ハビアンは文覚をあたかも「謀叛物語」全巻を見通している人物のように取り上げている。清盛、重盛父子に比べると、文覚物語に不足はないように見えるが、頼朝挙兵を唆す場以前の第四十六句「文覚」(覚一本「文覚荒行」「勸進帳」「文覚被流」)を全て省略して

いるため、やはり平家物語の持つ文覚像の魅力と物語性には及ばない。その省略部分は、常人の誰も及ばぬ荒修行やその場に現れる「大聖不動明王の御使」の童子たち、「めでたき瑞相」の数々によって、文覚の「ただ人」ならぬ超人性を語る章である。

こうして、三人の「不思議な人」は、その異常さ、超人性を物語的に支える神秘や夢、神仏の力を排除した形で『天草版』前半部に語られることになった。安達隆一氏はハビアン「問答形式の特性」を論じて、結論的に次のように述べている<sup>(11)</sup>。

「天草本」が原テキストにあたる「平家物語」を編纂・口訳した時、「平家物語」の持つ豊かな文学性は、その内容を担うにはあまりにも異質な言語的・文体的制約のゆえに、喪失せざるを得ない運命にあった。

この「言語的・文体的制約」に「キリシタンとしての制約」を加えると、ハビアンの担った編訳の業の困難と、結果として構成の不調和を抱えることとなった事情が理解される。

### （三） 妓王・仏段の問題

上に見たように、巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの登場人物は、この世のわざ一信念・行動・戦略・戦闘をひたすら生きて死ぬ人として描かれる。出家者である「入道清盛」「西光法師」「文覚上人」「俊寛僧都」もこの物語にあっては、あの世の生を思い求める人として語られていない。

そのような中で、女性四人の発心と出家の物語（覚一本巻一「祇王」）が、[巻Ⅱの1]に位置するのは何を意味するか。清瀬良一氏は「巻Ⅰで取り上げられなかった「妓王」が、その話が世人によく知られていたゆえであろうか、天草版の編者が仏教帰依の説話に共感を覚えたゆえであろうか、あるいはまた、ほかに何らかの理由があったのでであろうか」と不審を述べ<sup>(12)</sup>、市井外喜子氏は「清盛に対する私憤から出家する祇王、宗盛に対する私憤から…謀叛を企てた頼政、この親子（清盛・宗盛）の「fuxiguina coto <不思議なこと> が平家滅亡の前兆となることを語る」のが、巻Ⅱの主眼目であり、妓王の段がここに位置を占める必然性があるとしている<sup>(13)</sup>。清瀬氏は、先の不審の言に続けて「天草版の編者は特別な関心を持って口訳の業に従ったらしく古典平家の本文を省略した箇所も少なく、その口訳文はおおむね逐語的であり、一まとまりの話を形成している」と述べ、「ただし、…次の（巻Ⅱの2）話とは、直接的なつながりに欠けている」として、市井氏の「必然性」とは異なる見解を示している。

この段は平家物語において「一天四海を掌に握」った清盛が奢りの余りなした「不思議のこと」として語り出され、「四人の尼どもみな往生の素懐を遂げけるとぞ聞こえし」と結ばれる、独立した女人往生物語である。市井氏論のように「私憤によって出家する」姿が頼政と並べられるのは当を得ない。出家の機縁は権力者の横暴だとして、そこから深い自覚を得て往生を願う白拍子たちの物語は、「諸行無常、盛者必衰を主題とした平家物語の一縮図ともいうべき意味を見せる」「怨親平等の仏教的説話」であり「平家物語の仏教文学としての重要な一面を示す」と水原一氏が述べている通りである<sup>(14)</sup>。

しかし、異教である仏教の教えに従い、出家し、往生を願う物語は、『天草版』編纂の方針として「除かざればあるべからず」と指示された「志願のたよりとならざること」ではあるまいか。あるいは、大胆な省略で分りやすく物語を進めてきた前半部において、ほぼ逐語訳10ページ以上の仏教的説話がここに置かれたのはなぜか、数々の疑問を起させる段である<sup>(15)</sup>。

以上を踏まえて、平家物語と比較しながらこの段を読むと、「後生」「往生の素懐」「善知識」の三語が目される。

①『天草版』の「後生」の語17例中、実に10例がこの段にあり（対応する覚一本では全17例中4例）、その内の5例が「後生を願ふ」という原拠には見られない形である。ハビアンは原文を細かく操作して、妓王・妹・母・仏の四人が一人一人「後生を願ふ」と言葉を発し、しかも「四人一所に」「後生」に心を向けていると語っている。『日葡辞書』「後生」の項には「未来の生、あるいは別の世（来世）、また救霊」とある。

②『天草版』の「往生の素懐」は、妓王の言葉に「往生の素懐をとげうずることかなはうともおぼえず」「往生の素懐をとげうずることこそ、何よりも嬉しいことぢや」と2例のみである。しかも、覚一本に「往生の素懐をとげけるとぞ聞こえし」と語られる妓王たち四人の最後は、ハビアン訳では「余念もなく後生を願うて無事に終わった」とあるのみである。平家物語で「往生の素懐を遂げた」と語られるのは、妓王たち四人の他、千手（第九十四句「東下」）、源頼義（第九十八句「維盛入水」）、建礼門院（第一百十九句「小原御幸」）の計七人であるが、ハビアン訳では妓王たちのみが「往生の素懐」を抱き、それを遂げようとした出家者であり、結局誰一人としてその思いを遂げたものはいない。『日葡辞書』「往生」の項には「次の世に再び生まれること、また救済されること、すなわち Gêtio が思っているように Amida の Paraiso に行くこと」とあり、Feiqe の妓王段の「往生の素懐」が用例として挙げられている。

③原拠平家物語では、妓王が仏を往生の導き手として「うれしかりける善知識かな」と喜ぶが、ハビアンはこれを省いている。『天草版』の「善知識」は巻IVで重衡、維盛、宗盛に授戒する法然、滝口、本性坊という高位の上人を指す場合に限られる。『日葡辞書』「善知識」の項には「学問があり、非常に徳の高い僧侶」とある。

ハビアンは、このように注意深く言葉を取捨して、後生を願って念仏に専念する女性出家者四人を描いた。私はこの段の位置と意味について、千草子氏の見方に立って考えたいと思う。同氏の思い見たハビアンの回想は、次のようなものである<sup>(16)</sup>。

最初この段は、巻第一の第二としてくるべきものであった。…しかし、草稿をパードレ達の前で語った時、<sup>ゼンチョ</sup> 仏教の救いがあらわれた段じゃからふさわしくないとされた。…（数日後、ハビアンはパードレに向って言う）「世の中は男と女がおります。<sup>イストリア</sup> 歴史を語るのに、女を避けては片面ではござりませぬか。祇王祇女のことをここに<sup>かたつる</sup> 入れて、女にも<sup>ぶとう</sup> 無道な清盛が<sup>のちのち</sup> 後々罰を受けてゆくところを描いたほうが…それに、祇王、祇女、その母とじ、仏御前は、ベアータのような生活に入るわけでござるほどに…差し障りもござります

まい」。パードレは了承した。

まさしく、妓王たち四人の白拍子たちは「ベアータのような生活に入るわけ」であり（ベアータはベアトすなわち聖人・福者の女性形。聖女・修道女）、ゼンチヨ（異教徒すなわち仏教徒）による「後生を願う」物語がキリシタンの目指す救霊の物語と重なる。ハビアンは、兩人問答の物語進行方式を利用して、巻Ⅰ巻頭「清盛の行儀の不法」「平家の悪行」、巻Ⅰ巻末「人の思ひ嘆きの積る平家の末はなんとあらうか？」からの射程距離ぎりぎりの位置である巻Ⅱ巻頭に、内容としては巻Ⅳの仏教的物語群に呼応するこの章を置いたのだ、と私には思われる。

#### 四、『天草版平家物語』後半部（巻Ⅳ）の特異性

後半部（巻Ⅳ）においても、右馬之允と喜一檢校兩人は、息の合った問答で平家を語り続け、源平合戦場に最後の争闘を繰り広げる人々の言動は躍動する。しかし、ここには前半部に圧倒的にまさって平氏の死者たちの物語がある。彼らを仏道に導く善知識の上人たちの言葉がある。生き残った家族・従者は死者の「後世」を弔い、嘆きつつその死を語り続ける。

ここで、その中心人物維盛を取り上げて、ハビアンの語るところをやや詳しく読んでみたい。

##### （一）小松三位中将 平維盛物語

原拠平家物語において、平維盛は巻一「吾身の栄華」に、

吾身の栄華を極るのみならず、一門共に繁昌して、嫡子重盛内大臣の左大将、次男宗盛中納言の右大将、三男知盛三位の中将、嫡孫維盛四位少将

と名を刻されてより、巻十二「断絶平家」にその子六代の死をもって「平家の子孫は長く絶えにけれ」と語りおさめられるまで、一卷を貫く主人公の一人である。巻三までの維盛は常に父重盛と共にあり独自の動きはないが、父亡き後、平氏の正統嫡々の大將軍として源氏征討のため東国に発向、その様は「生年廿三、容儀躰拜絵ニカクトモ筆モ及ガタシ」。しかし水鳥の羽音に驚き戦わずして大敗走、帰り上れば、「入道相国大ニ暎テ大將軍小松権亮少将ヲハ鬼海嶋へ流スヘシ」と声を荒らげ、嫡孫の面目は失われた（巻五）。近江発向、南都発向に維盛の名はなく、木曾討伐の倶利伽羅合戦で敗退、「大將軍維盛ハカリ辛キ命生キテ」退却、木曾は勢いに乗って都に迫る（巻七）。

この弱将維盛が、「平家都落」（巻七）より物語の前面に大きく姿を現してくる。この章の妻と二人の子を都に残す家族分離の悲嘆を序曲とし、一の谷の戦場離脱から入水までの詳細な維盛の物語（巻十）は、一の谷で生捕りとなった平重衡の物語と共にまことに重く、水原一氏の述べる「平家嫡流の重責に対してあまりにも弱い」「落伍者維盛の物語がなぜ…詳細に繰り返して語られるのか」<sup>(17)</sup>との思いは誰の心にも湧くだろう。

『天草版』は、巻Ⅲ・Ⅳの計4章30ページを占める分量と精密な訳文で、この維盛物語をほとんど洩らすところなく語っている。前半部の清盛・重盛の物語に大きな空白がある中で、後

半部の嫡孫維盛が家族・従者との関りを含め詳細な物語を持つ点に注目したい。

[巻Ⅲの7] [物語の一節] 北の方泣く泣く起き上がって、袖にとりついて、都には父もなし、母もなし、捨てられまらしてのちに、またたれにまみえませうぞ?…まことに人は十三、維盛は十五といふ時から、たがひに見そめ、見えそめて、ことしはすでに十二年…

[巻Ⅳの10] [物語の一節] 三位の中将今はいぶせかった故郷のことも伝へ聞かれたれども、妻子はもとより心をわづらはするものなれば、もの思ひ (\*恋慕ノ思ヒ <百二十句本、以下同じ>) もいやましになり、今は穢土を厭ふに便りがある：閻浮愛執の絆が強ければ、浄土を願ふに倦み、今生では妻子に心をくだき、当来では地獄 (\*修羅) に落ちうことが心憂い。

[巻Ⅳの13] [物語の一節] 小松の三位の中将はわが身は屋島にありながら、心は都に通ひ、故郷に残しおかせられた北の方、幼い人々のことをあけても、暮れても思はれたれば、あるにかひないわが身ぢゃと思ひわびて (\*最倦ク覚エテ)、寿永三年三月十五日の暁しので屋島の館をまぎれお出あって、… (妻子のいる都に) 千度心はすすめども、心に心をかからうて、ひっかへ高野へ上らせられた、

[巻Ⅳの14] 維盛物語の最終章である。先んじて重景・石童丸が受戒するも、維盛はなお家族のこと、平家嫡々のわが身のこと、亡父重盛の熊野参詣のことを思いめぐらしつつ、滝口を善知識とし熊野へ参り着く。続いて、平家物語本文は、「比ハ三月廿八日ノコトナリケレハ春モ既ニ暮ナントス 海路遙カニ霞ミ渡テ哀ヲ催スハカリナリ」(第九十八句「維盛入水」と滅びの歌を奏るが、ハビアンはここを「さて熊野へ参りつかせられて」と一言に括って、入水の場面となる。

[物語の一節] さて熊野へ参りつかせられて、後生善所と祈らせらるるにも、なほ北の方幼い人々のことが心にかかるを、滝口種々様々に教化申せば (\*…トテ頻リニ鐘打鳴シツ、念仏ヲ勸メ奉ル)：思ひきって念仏数百べん唱へさせられ、つひに海に入らせられるれば、(\*三位中将忽ニ妄念ヲヒルカヘシ念仏数百返唱ヘツ、終海ニソ入玉フ) …

このハビアン訳「(維盛が) 後生善所と祈らせらるる」と「滝口種々様々に教化申せば」に注目したい。どちらも平家物語に対応する語句はなく、ハビアンが思うままに綴ったところである。原文「罪深カランナレハ、懺悔スル也」を意識・要約した「後生善所と祈る」という語句は、ハビアン訳全巻を通してこの一箇所だけである。

「後生善所」は、『日葡辞書』に『天草版』のこの箇所を用例として、「後生善所 Goxō jenko Paraiso <パライソ 天国> のような非常に良い所」とある。ハビアン著『妙貞問答』(1605)には「現世安穩、後生善所ノ真ノ主一体在マス事」という一項があり、「後生ノ善所ハ、ハライソト云イテ天ニアリ」とあるなど、キリシタン書に多く用いられる語である。

「祈る」は、「後世のことよくよく祈らせられてのち、(\*申サセ玉ヒテ後、第九十九句「池大納言関東下」) つひにおん身を投げさせられたこと」(維盛北の方が伝聞する夫の消息)、「後

世のこと御祈誓あつて（\*祈精申サセ）<sup>マツ</sup>」（北の方を慰める若君の乳母の言）に通う。前者は原文「申す」をハビアンが「祈る」としたところで、この「後生善所と祈る」と響き合っている。愛執妄念にあるわが身の後世をあやぶみ、乳母子らに「身が後世をも弔ひなどせいかし」と言いおいた維盛最後の祈りである。

また、滝口が維盛に説く最後の説教は、平家物語にあつては「生者必滅会者定離ハ浮世ノ習」「出家ノ功德ハ莫大ナレハ先世ノ罪業モ滅シ」など、仏道説法の定型句語に満ちた二十数行の長文であるが、ハビアンはこれを「種々様々に教化」の一言に要約した。「教化」は覚一本平家物語に2例あるが（その1例は法然が重衡を「教化」する<sup>(18)</sup>）、百二十句本では、どの上人の場合にも用いられていない。

「教化」は、「衆生を教え導いて恵みを与えること、説法」（『日本国語大辞典』）を意味する仏教語である。しかし、「儒教などで言うところの倫理的な教え、徳育」を意味するともあり（『時代別国語大辞典 室町時代編』）、こうした儒仏通用性をもとに、「教化 qeðqe」は翻訳キリシタン書にもキリスト教の文脈で広く用いられる語となった。例えば『ドチリイナ・キリシタン』（1592年刊、ローマ字本）に「その儀を承ればこそ、ご教化に与りたきと望むなれ」（第一ドチリイナ）とあり、「善徳、あるいは、救霊の事についての忠告、または教訓」（『日葡辞書』）の意味で用いられている。このようにハビアンは維盛自身の最後の祈りと師の最後の教えを、翻訳キリシタン書にも通用する二つの句語で言い留めている。

こうして愛執愚痴の人維盛は、奇特無類の祖父清盛の力、智慧深甚の父重盛の達観とは全く異なる「唱導」の場において主人公となったのである。

## （二）重衡、小宰相、宗盛の物語

巻IVにはもう一人、わが身の「後世」を煩い「後生」を願う平重衡がいる。一の谷で捕われ、南都焼討ちの咎により鎌倉に送られる重衡は、「わが在世の時見参した聖に後世のことを申し合せうと思ふは何と」と強く請うて法然上人より受戒し、善知識を得たことを喜び「後世弔うてたまはれ」と別れる〔巻IVの11〕。維盛と機縁は異なるが、「後世」を念ずる人として描かれている。ただし、ハビアンは第百十二句「重衡之最後」を省略したため、重衡像は維盛のようには完結しなかった。重衡は維盛と対照的に剛毅な武人として語られる一方、北の方のほか、内裏の女房、千手と女性達に囲まれているところも、夫婦の相思相愛がそのまま妄念であった維盛と異なる<sup>(19)</sup>。

関連して小宰相入水〔巻IVの10〕について一言する。ハビアンは第九十句「小宰相身投」前半の入水の場面を原文に忠実に訳している。自ら死に赴く小宰相は、維盛と同じく、キリシタンの教えによれば「除かざらばあるべから」ざる物語である。しかし、夫に従って西海の波の上に漂い、夫の戦死を追うて胎の子ともども、高声念仏、身を投ずる女性の物語は、「貞女両夫にまみえず」の教えに適い、「のちの世」に思いをめぐらす女性像として丁寧に刻まれたも

のと思われる<sup>(20)</sup>。

なお、重衡と小宰相二人の姿が、屋島から紀伊の路、高野、熊野を迷い巡る維盛の脳裏を離れなかったことを平家物語は語り、ハビアンもこれを訳出している。

重衡と同じく鎌倉に送られ後に斬られる、平家の総大将大臣殿宗盛の最後〔巻Ⅳの21〕にも、善知識の上人が登場する。ハビアンは維盛・重衡の最後ではそれぞれ滝口入道・法然上人の説教を省略したが、ここで三人の「善知識」を代表するかのよう、大原の本性房の説教をほぼ全てを訳している。

この世は生者必滅の国なれば、生るるものは必ず死に、あふものは定まって別るるならひぢや：生を受けさせられてからこのかた、楽しみ栄えて、昔も今もためし少ない帝のご外戚で内大臣の位にいたらせられ、今生の御栄華残るところもない。楽しみつきて、悲しみきたるは世のならひでござる。

しかし、この続きの宗盛受戒をハビアンは記さない。「(上人は)しきりに念仏をすすめたれば、大臣殿たちまちに弱い心を思ひかへいて(\*妄念ヲ翻シテ)高声に念仏を唱へさせらるるところに」とあるのみで、平家物語の「戒ヲ授ケ奉り」を訳出していない。そもそも宗盛は、壇の浦で息清宗と共に生き残るところから、副将との別れ、清宗と最後の時を迎えるまで恩愛の父である。善知識の上人を召すのも敵将義経の心遣いであり、身に迫って「後世」を思う人として描かれていない。「妄念ヲ翻シテ」を「弱い心を思ひかへいて」と言い換えるのは維盛の場合と同じであるが、維盛・重衡と異なって受戒の場面がないのは、こうした求道の内面の違いを表したものと思う。

### 結び一編・抄訳の態度の転換と巻Ⅳの意味

ハビアン抄訳『天草版平家物語』は、イエズス会の師の「兩人雑談の体で口語訳すること」「人名称呼を一定にすべし」「志願のたよりにならぬことは除くべし」との指示に従い、「本書のこぼをたがへず書写し、抜書きとなした(緒言)ものである。これまで見てきたように、これらの指示・方針に関わるいくつかの指標が、『天草版』の前半部・後半部に編・抄訳の仕方に違いがあることを示している。

その「態度の転換」の内実と理由はどのようなものか。確言できる根拠は少ないが、清瀬良一氏の見解(注5の論文、この稿の92ページ)を参考にして、私にまとめるとすれば、

① 全体を通して、VMとQI 二人の問答による物語進行と、印象的な場の設定、そして登場人物の行動と言葉を中心に抄訳するという方針で、有用な語学・歴史教材を目指す。

② 前半部(巻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)は、清瀬氏が「口語性の豊かな語句」「〈平家物語〉の表現面とのへだたりが大きい」と分析しているように、当時の現代語に近く分り易い言葉を用いている。原典を大胆に省略し、時間や人間造型にはこだわらない自由さで、いわば初級編の教材編纂である。

③ 後半部（巻Ⅳ）は、清瀬氏が「逐語訳が目立ち」「文語的な語句が見られ」「〈平家物語〉の表現面と密着した文」と分析しているように、古典的な語を含めて、いわば中級編の趣きである。[巻Ⅳノ12]（重衡東下り）の初めには全く原文そのままの1ページ余があることも参考になる。原典と同じ時間表記、巻構成で、本格的な平家物語学習に近づいている。

④ 再び全体を通して、「キリスト教布教のたよりにならぬことは除くべし」との編集方針は、前半部・後半部で「転換」することはない。神仏の深い教えや積極的働きかけ、予言・神秘・夢告の記事を除き、あるいは書き換える。しかし、一方で妓王・仏たち、重盛・維盛など来世を思う人々にキリスト教信仰者を重ね、共感を込めて丁寧に語るところに、異教を排除するだけではない、キリスト教文学者の隠れた思いが見える。

思えば、平家物語の「奢れる人」「たけき者」は「悪行者」清盛ばかりではない。法住寺殿の賀宴に連なる重盛・維盛は一門の栄華に奢り（『建礼門院右京大夫集』）、叛心を抱いて鹿ヶ谷に集う成親・西光・俊寛たち、平氏に楯突く頼政・頼朝・義仲・義経、彼らに従う侍たちの猛きふるまいも、清盛には劣るとも並みのものではない。一方、「わが立てし道なれば」と歌舞の芸を誇る妓王も加賀から上洛して清盛邸に「推参」する仏も「奢れる人」に違いない。この人々の中から、両極の「奢れる人」——片や高名高位の僧の説教に導かれながら、真の道に入ること難い平氏の公達、片や無名の女性芸能者たちの発心と後生を願う心を語ることは、仏道を説く者にとってと同様、「後生ノ善所ハ、ハライソト云イテ天ニアリ」と説くキリスト教文学者にもふさわしいことであった。

『天草版』の後半部巻Ⅳは、「後生」を求めつつ死に相対する人々、生き残って死者を弔う人々の物語が、源平争闘の場面にあざなわれるように語られる。「この世」の修羅と「あの世」を求める心との二つの世界がある。ただし、ハビアン訳にあっては、その中心人物維盛がそうであったように「罪深カランナレバ懺悔スル也」と告白し「妄念ヲ翻シ」て死に臨んだものは一人もいない。また、妓王の段で触れたように「往生の素懐を遂げた」と語られる者も一人もいない。それは、「真の救いとは」という問いに対する、仏僧でもあったキリスト教文学者ハビアンの、密かな主張、控えめな宣言であったように思われる。

しかし、往生を遂げないまでも、それを願う人々の言葉を、ハビアンは何と豊かに残してくれたことだろう。白拍子仏の言葉「娑婆の栄華は夢の夢」、維盛の「あるにかひないわが身ぢゃ」と内心を照らす言葉、大原の本性坊の説教「生まるるものは必ず死に、あふものは定まって別るるならひぢゃ」というように。

室町時代には、唱導の場で用いられた小さな談義本一説経僧が懐中した説草集一があったという<sup>(21)</sup>。ハビアンが平家物語から選び取って訳した発心出家に関する言葉、上人の説教などは、この「説草」にもなり得るものではあるまいか。さすれば、『天草版平家物語』の仏教的な物語もキリスト教説法の場合に用いられ、「志願のたより」に適う働きをなしたのかもしれない<sup>(22)</sup>。

〔注〕

- (1) 『天草版平家物語』の使用本文は『ハビヤン抄 キリシタン版 平家物語』(改訂版、亀井高孝・阪田雪子 翻字、吉川弘文館 1980年)である。その原本を影印した『天草版平家物語』(大英図書館蔵本影印、勉誠社 1994年)を参照する。本稿において、『天草版』と略称する。また、『天草版平家物語』の巻・章はQUAN DAIICHI・DAIICHI (翻字では「巻第一・第一」)のように記されているが、本稿では清瀬良一氏『天草版平家物語の基礎的研究』(淡水社、1982年)に倣い、[巻Iの1]とし、原拠平家物語と比較する際に紛れないようにした。また、本稿に引用、注記するの他、次の書を参照した。  
海老沢有道氏・井手勝美氏・岸野久氏『キリシタン教理書』(「キリシタン文学双書」教文館 1993)、新村出氏・柘源一氏『吉利支丹文学集』1,2, (東洋文庫 平凡社 1993)、井手勝美氏『キリシタン思想史研究序説』(ぺりかん社 1995)、米井力也氏『キリシタンの文学—殉教をうながす声』(平凡社 1998)、土井忠生・森田武・長南実氏編訳『邦訳 日葡辞書』(岩波書店 1980)
- (2) 『天草版』との比較に用いる平家物語本文は、清瀬良一氏『天草版平家物語の基礎的研究』(淡水社 1982年)の研究成果により、[巻I] および [巻IIの1] においては覚一本(その一本龍谷大学本を底本とする『日本古典文学大系 平家物語 上・下』岩波書店、1959・1960)、それ以降は 百二十句本(斯道文庫蔵『百二十句本 平家物語』汲古書院 1970)である。
- (3) 『天草版』[巻IVの10]の次章に再び[巻IVの10]があり、後者は「第十」と翻字されている。
- (4) 小稿「天草版平家物語序説—ハビヤン抄の方法—」(『佛教学大学院紀要』第36号、2008年3月)。
- (5) 清瀬良一氏「天草版平家物語における口語訳の存立形態」(『国語学』74号、1968年9月)。
- (6) 問答体については、安達隆一氏『『天草版平家物語』の構成と言語』(一)(二)(『人文学部研究論集』2000-2001)が詳しい。小稿(注4)においても触れている。
- (7) 「天道」「天」については、中本茜氏『『天草版平家物語』の神仏表現』(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第32集、2010年12月)に詳しい考察がある。小稿(注4)においても触れている。
- (8) 鈴木則郎氏「天草本平家物語の性格」(東北大学文学会『文化』第35巻第3号、1971)。
- (9) 渥美かをる氏『平家物語の基礎的研究』(第二章「平家物語における人物像」第一節「清盛像」)。
- (10) 鈴木則郎氏「天草本平家物語の性格(三)」(『宮城学院基督教文化研究所研究年報』第6-7号 1973)
- (11) 安達隆一氏(注6)の論文。引用文に続いて「その代価が安田章のいう「中世の語りの表現機構」の現出である。「天草本」の語りは、「平家物語」が辿ったあるいは辿る語りと重なる部分をテキストの表層に言表として顕在化させつつ、独自の語りを異国の読者の机上に出現させたのである」と述べている。
- (12) 清瀬良一氏『天草版平家物語の基礎的研究』(淡水社 1982年)。

- (13) 市井外喜子氏『天草版平家物語私考』（新典社 2000）。
- (14) 水原一氏『新潮日本古典集成 平家物語 上』74ページ、頭注「義王の物語の意義」。
- (15) 妓王段の「後生」については、小稿『天草版平家物語論（一）—後生を願う人々—』（『佛敎大学大学院紀要 文学研究科篇』第37号、2009年3月）において考察した。
- (16) 千草子氏『ハビアン平家物語夜話』（平凡社 1994年、110ページ）。
- (17) 水原一氏『新潮日本古典集成 平家物語 下』136-7ページ、頭注「弱者維盛」。  
なお、維盛像については、水原一氏「維盛・六代説話の形成」（『平家物語の形成』加藤中道館 1971）及び、池田敬子氏「心弱き人の往生—維盛入水—」（『説話論集 第二集』説話と説話文学の会編 清文堂 1992）に学んだ。
- (18) 覚一本平家物語の「教化」2例。①「其時閻王哀愍教化して、種々の偈を誦ず」（巻六「慈心坊」）②「（法然上人は）…と教化し給ひければ、中将（重衡）なのめならず悦て」（巻十「戒文」）
- (19) ハビアンは重衡が受戒後、文を交す女性を「北の方」として語り、「内裏の女房」は登場しない。重衡が鎌倉で会う千手は重衡の死後、「様を変へ、信濃の善光寺に行ひすまいて、かの後世菩提を弔うたと、きこえまらした」（百二十句本「我カ身モ往生ノ素懐ヲ遂ケニケリ」）。
- (20) 「キリスト敎では、人間の命は神の創造の業であり、人間は自らその命を放棄する権利を有していない。…自殺は神の意思に反する傲慢な反逆であり、神の愛を否定する絶望であり…公共の善と自己愛に反する…大罪だとみなされた」（『岩波キリスト敎辞典』2002年の「自殺」の項、英隆一朗執筆）。また、国字本『どちりな きりしたん』（1600年刊）の「第十、さんたゑけれじやの七のさからめんとの事」には、夫婦の掟三条が定められている。①男女とも離別は叶わず、②余人と交わること叶わず、③デウスより「離れざる朋輩」と定められた夫婦は互いに協力しあい、育児に「緩かせあるべからず」（以上、要点摘記）。キリシタン・ハビアンは「忠臣二君、貞女両夫」（原文にある）の儒敎道徳に乗ってでも小宰相と通盛夫婦を描きたかったのではないだろうか。また、一夫一婦の堅い契りに子を思う親、という維盛の家族の物語を語ることに大きな意味があった、と想像する。
- (21) 岡見正雄氏『室町文学の世界』、黒田彰先生「長谷聞書のこと一場の物語と説草一」（『中世説話の文学史的環境 続』）の説くところである。
- (22) 千草子氏（注16）の著作に、パードレがミサ説敎の中でハビアン訳「FEIQUE」の「まことに人は十三、維盛は十五といふ時から」（巻Ⅲの7）を用いている場面がある（143ページ）。

（たまかけ ようこ 文学研究科国文学専攻修士課程修了）

（指導：黒田 彰 教授）

2011年9月30日受理